



Virtual Insanity

— 仮想への熱狂 —

会員 杉本 隼与 (61 期)

哲学者のミシェル・フーコーは、狂気とは、理性がそのアイデンティティーを保つため、「理性に対立し、排除されるべきもの」として生み出された概念であると説く。彼の述べるのが真実だとすれば、狂気とは事実の問題ではなく、単に認識の問題であるにすぎないものとなる。理性を常識と言い換えた場合、あくまで常識から外れているから狂気なのであって、常識の範囲が変われば、狂気の範囲も変遷するものであるともいえる。

一般的に、現実に存在しないバーチャルなキャラクターに愛を注ぐことは、常識に反するものと考えられている。「初音ミク」が透明なスクリーン上にて歌う姿を、毎年2万人規模の人間が熱狂をもって観戦する姿は、あるいは「狂気」であると判断する人もいるかもしれない。ゼロとイチだけで構成された「初音ミク」は、どれほど熱狂的に恋焦がれようと、所詮はバーチャルな歌姫ではない。そうである以上、「初音ミク」を愛するのは、常識に反する、つまり、「狂気」であるということもできる。

ある意味、「初音ミク」より一層の「狂気」をふりまくものとして、バーチャルユーチューバーという存在が挙げられる。先駆者的存在である「キズナアイ」がNHKにて取り上げられたため、その名を聞いたことのある人もいると思う。バーチャルユーチューバーとは、架空のキャラクターに扮して、動画配信を行う人々をいう。彼・彼女らの存在のもっとも「狂気」なところは、キャラクターを演じている実在の人間が存在するにもかかわらず、動画配信を行うのは、あくまで架空のキャラクターであり、視聴者が熱狂するのも、動画配信を行っているバーチャルなキャラクターそれ自身であるという点である。演じている人間に熱狂が向けられることは、原則としてない。このようなバーチャルユーチューバーは、近年爆発的に増加し、現在、3000人以上存在しており、それらの合計再生数は約5億回であるという。

もちろん、少なくとも現在の常識では、バーチャルなキャラクターに愛を注ぐことはやはり常識に反するものとされる。それにもかかわらず、バーチャルユーチューバーのこれほどの増加は、現代日本には、バーチャルなキャラクターに愛を注ぐ、「狂気」を纏った人間が多数存在しているということを示しているともいえる。

では、我々の世界は、「悪い方」へと向かってしまっているのだろうか。

『なるほど、私が狂っていることは君の常識が保証してくれるのだろう。だが、君のいう常識が正常であることは、いったいどこの誰が保証してくれるのか』

私としては、悪い方へと向かっているという悲観論者に対しては、そういう異議を挟みたくなる。

バーチャルユーチューバーである「月ノ美兎」の配信をPCから流しつつ、顧問先の声優事務所から提出された、バーチャルユーチューバーに関する契約書をレビューしている私も、見方によっては、十分に「狂気」を纏っているといえるだろう。

仮想への熱狂を作り出し、ときに、自ら仮想に熱狂していく。

バーチャルにかかわる業界というのは、つくづく因果なものである。



東京ビックサイト